

馬市の国境石

一 発見された基礎石一

旧薩摩街道が通っている筑紫野市馬市(西小田)と小郡市乙隈の市境に、筑前・筑後の境を示す「従是北筑前国」「従是南筑後国」銘の国境石が、大きさを競いあうように並んで建っています。これは、延宝年間(1673~1680)に筑後国・府中宿から筑前国山家宿に至る薩摩街道が整備されたことに伴い、江戸時代後期に久留米藩と福岡藩によって建てられたものです。

しかし、両国境石は長い年月の間に筑前側の廻縁(基壇の上段にあって棹石を囲むように設置された石)が沈下し、棹石(石柱)は傾いていました。筑後側の基壇は戦時中に戦車

がぶつかってズレが生じていましたので、平成11年度から15年度にかけて、筑紫野市・小郡市両教育委員会が共同で復原・修復・整備工事を行いました。整備工事に先立ち、両市教育委員会では国境石の基壇の一部を解体し、発掘調査を実施しました。

筑紫野市教育委員会がおこなった解体調査の結果、基壇中心部には現在の棹石を支える礎石があり、さらにその下に前代の国境石の礎石があることが分かりました。

また、前代の礎石の上に建っていた棹石は、基壇の一部に再利用されていることも分かりました。



▲前代の礎石



▲礎石



▲棹石 (従是北筑前國)



▲解体中の国境石

棹石は基壇の石にするため加工され、表面はかなり削られています。『□□北筑□領』の銘が確認できます。これは小郡市埋蔵文化財センター敷地内に保存されている「従是南筑後領」銘国境石を参考にすると、「従是北筑前領」と刻まれていたと思われます。また、風雨にさらされ、銘文はウッスラとしか見えませんが、「享□十八□□丑□十月□」の年号を確認する事ができました。

江戸時代の年号をみると、18年以上続く時代は「慶長・寛永・享保」の三時代です。先に述べたように、薩摩街道が整備された時期が延宝年間であることを考えると、刻まれた年号は「享保十八年癸丑十月」と考えられます。

これまで、「従是南筑後領」銘の棹石だけが知られ、筑前側の棹石の所在が確認されていなかったために、「筑前国の前代のものは木杭ではなかったか」といわれてきましたが、

今回の「筑前領」銘の石柱の発見により、それが覆されました。

福岡県内旧筑前藩の境石・傍示石は、天保年間(1830～1845)以降にほとんどのものが「領」から「国」に改められています。このことから「領」銘のある境石・傍示石は少なく、嘉穂郡穎田町・田川郡添田町・朝倉郡小石原村等に僅かに残っているだけで、いずれも年号の刻銘はなく、建立時期は明確ではありません。今回確認された棹石の銘「享保十八年癸丑十月」(1733)は、確認された唯一の年号です。

久留米藩の寛延3年(1750)頃の記録には、「従是南筑後領」の境石が建っていたという記述があります。このことから寛延3年には、すでに現在地に「領」銘の両国境石が並んで建っていたことがわかります。

(渡邊和子)



▲整備後の国境石